



Title	境界線上のハンナアーレント政治理論の内／外をめぐって
Author(s)	三浦, 隆宏
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47096
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 **三 浦 隆 宏**

博士の専攻分野の名称 博 士 (文 学)

学 位 記 番 号 第 20781 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 19 年 3 月 23 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第 4 条第 1 項該当

文学研究科文化形態論専攻

学 位 論 文 名 **境界線上のハンナ——アーレント政治理論の内／外をめぐる**

論 文 審 査 委 員 (主査)

教 授 中岡 成文

(副査)

教 授 鷲田 清一 助教授 本間 直樹 助教授 舟場 保之

論 文 内 容 の 要 旨

本論文はまえがきと付論以外に、以下のⅡ部 6 章からなる。第Ⅰ部「複数性・活動・自由——アーレントにおける〈政治〉をめぐる」（第 1 章他者の存在を必要とすること——「複数性」という概念装置、第 2 章活動の具体的な姿——「哲学カフェ」という行ない、第 3 章〈政治〉の存在理由——活動において経験される「自由」）、第Ⅱ部「権利・教育・思考——アーレント政治理論の〈境界〉をめぐる」（第 4 章個人的な経験をもとにした思考——「諸権利をもつ権利」ということば、第 5 章世界のうちへと導き入れること——「教育」の周辺をめぐる、第 6 章活動しながら考える——あるいは「政治的に哲学すること」）。

第 1 章では、全体主義や政治哲学に対するアンチテーゼとして、人間の条件そのものである複数性という言葉に H・アーレントが着目するに至った経緯を明らかにし、「活動」が本質的に他者の存在を要請する概念であることや、複数性が平等性と同時に差異性を前提することを指摘したのち、ある人の「誰であるか」は活動＝政治を通じてのみ明らかにされることに注意を促す。

第 2 章では、アーレント自身の説明からはやや具体像が浮かびにくい「活動」概念に肉づけを施すものとして、申請者がかかわっている「哲学カフェ」という種類の「行ない」を検討する。哲学カフェこそ、「あらゆる人間が現われることができ、自分じしんが誰であることを示すことができる公的領域」であると主張し、カフェの進行役を政治の領域の〈境界〉に立つ者として性格づける。

第 3 章では、「政治的自由」と、全体主義によって消滅せしめられた「内的自由」とを比較検討しつつ、全体主義以後を生きる我々は古代ギリシアの〈根源〉、すなわち政治的自由へと立ち戻るべきことを論じる。

第 4 章では、閉鎖的な政治共同体である国民国家から締め出されると同時に人類からも締め出される運命を味わわなければならない「無国籍者」についての議論を顧みつつ、人権に対する省察がアーレントを哲学から政治理論に転回せしめたと主張する。他方では、アーレント自身の経験と思索からこぼれ落ちた種類の「権利」（とそれを奪われた人々）の存在を批判的に示唆し、「活動」をアドヴォカシーへと拡大する必要を浮き彫りにする。

第 5 章では、アーレントが子どもを「完了しておらず生成の状態にある」独特な存在と捉えたことから出発しつつ、彼女のいう「社会的なるものの領域」の勃興は現在の日本における教育的領域の拡大にも反映されていると指摘する。

第 6 章では、前章で言及された「世界疎外」の過程を巡り、食い止めるものとして、人間の思考と活動の力について論じる。一部のアーレント解釈に抗しつつ、思考と活動とが彼女においては明確に区別できないこと、「活動しながら考える」という思考様式を構想すべきことを指摘している。

論文審査の結果の要旨

本論文はアクチュアルで明確な問題意識をもってアーレントの諸テキストと対峙し、アーレントやアーレント研究者の所説、関連する諸テーマをめぐる論争などから豊富な示唆を得つつ、部分的にはアーレントを補完し、さらには突き抜けてさえいく意欲を思想的・実践的に具体化している。申請者は内と外との「境界線」に自らをも、思想をも立たしめることによって、ジェンダー、教育、マイノリティー、共同体などの現代的諸問題に積極的にコミットする。

「哲学」という権威・ディシプリンにさえ寄りかかることを拒み、臨床哲学の体現を標榜しつつ、個人的実践を理論的探究と結びつけていこうとするその不羈の姿勢は、印象的である。とりわけ哲学カフェという歴史の浅い対話活動形態を、本格的に哲学的・理論的な分析の対象とし、その「哲学性」や進行役の境界的位置を正面から問う試みは、今後の研究・実践に一つの範を示すものと言えよう。

他方、いくつかの問題点が散見されることも事実である。少数のテキストにおけるアーレントの自己解釈に依拠して彼女の全体主義理解の問題性を突きえていない点、複数性というキーコンセプトの解明が不十分で二種類の複数性が予定調和的に並置されており、ギリシア思想との対話の中でこのコンセプトが練り上げられたことの顧慮が足りない（アプリケーションに偏っている）点、同じく重要な概念である「活動」と言論との関係が不明確である点など、理論研究としてはやや奥行きと完成度に欠ける感を否めない。また、そもそもなぜ共同体に属しないと「権利」を剥奪されるのか、対話における進行役の役割はソクラテスの産婆術とどのようなかわりをもつのかなど、申請者の言う「境界線」をめぐる立言・立論にも議論を呼ぶものが少なくない。しかしながら、これらの点は、後期のアーレントとともに活動を再び「思考」へと関係づけようとする申請者の今後の思想的・実践的熟成によって、十分に補正を期待することができる性質のものである。よって本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。